

教育委員会会議録

令和3年(2021年)11月定例教育委員会会議

開 会 日	令和3年(2021年)11月25日(木)	
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 5時00分	
開 会 場 所	教育センター 4階 大研修室	
出 席 者	委 員 会	遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員
	事 務 局	松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他
提 出 議 案	議第84号 令和4年度(2022年度)市立学校の管理職(再任用)の採用について	
協 議	(1) 令和4年度予算要求の概要について	
報 告	(1) 千原台高等学校及び総合ビジネス専門学校改革に係る教育課程の編成等について (2) 金峰山少年自然の家整備について (3) 子どもたちの心のケアについて (4) 不登校児童・生徒に対するオンライン学習支援について (5) 必由館高等学校改革に係る学校提案について	
自 由 討 議	第2回広聴事業の振り返り	
署 名	泉 薫 子	
	遠 藤 洋 路	
会議録作成者	教育政策課 木村三恵	

〔開会の宣告〕

遠藤洋路 教育長

令和3年11月定例教育委員会会議を開会いたします。

〔会議の成立〕

遠藤洋路 教育長

本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。

会議録署名人は、泉委員と私とします。

〔公開の審議〕

遠藤洋路 教育長

本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、第84号 令和4年度(2022年度)市立学校の管理職(再任用)の採用については、「教育委員会に属する職員の任免その他の身分取扱に関する案件」であること、また、協議(1) 令和4年度予算要求の概要については、「教育予算その他議会の議決を経るべき議案についての意見の申出に関する案件」であることから、会議規則第13条第1号及び第2号の非公開事由に該当し、非公開の審議が適当と思っておりますがいかがでしょうか。

議第84号及び協議(1)につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。

(全員挙手)

遠藤洋路 教育長

全員賛成により、議第84号及び協議(1)は、非公開とします。

日程第1 前回会議録等承認

遠藤洋路 教育長

10月28日開催の令和3年10月定例教育委員会会議録、11月8日開催の令和3年第6回臨時教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録等を承認することに、ご異議はありませんか。

(異議なしの声)

異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。

日程第2 事務局報告

(1) 事業・行事等報告について

○ 前回定例会議（R3.10.28）以降の事業・行事報告

○ 今後の予定

日程第6 自由討議

遠藤洋路 教育長

議事の都合により、始めに「日程第6 自由討議」に入ります。

・自由討議 第2回広聴事業の振り返り

《中元正人 教育政策課長 説明》

西山忠男 委員

一番印象的だったことはソーシャルスキルトレーニング、あれが非常に有効だというお話で、それも託麻東小学校から始まって二岡中に波及したと。それが教育上、とても良い効果を上げていると。その話がとても印象的だったので、それは他校にも普及できる取組ではないかなという非常に良い印象を受けました。そのことをまず申し上げたいと思います。

あと、気になった点は、中学校のプログラミングの授業なんです。懇話会するときにもお話ししたんですけど、やっぱり取り残されている児童がいて、どう手をつけていいかわからないと。先生方とのお話し合いの中でも、先生方から、なかなか個別指導まで手が回らないというお話がありましたので、そここのところは今後、やはり少し改善していくべきかなというその点はよろしくお願ひしたいと思います。

もう1点。すみません、続けてよろしいですか。

最後に、印象に残ったのは託麻東小の施設の老朽化と狭隘化ですね。特に職員室が狭隘であるというお話をさせていただいたんですけど、またコロナが拡大したときに職員室で集団感染ということが起こらないとも限りませんので、その辺の対策が必要かなということを感じました。

それから、校舎も中庭にプレハブを建てるという計画も伺いましたが、ちょっとやっぱり環境が悪くなるなという感じがしたので、できればもっと広い庭の方にちゃんとしたものを建てていただければありがたいんじゃないかなということを感じました。

二岡中さんの方は新設の体育館もできていて、非常に良くなっているので問題ないかと思いました。そういう印象を受けま

遠藤洋路 教育長

した。

以上です。

ありがとうございます。

主に3点ほどあったかと思えますけど、もし校長、教頭から何かコメントがあればお願いしたいと思えます。

ソーシャルスキルトレーニングは本当に私もすごいなと思いました。託麻東小は非常に大規模な学校でありながら、最初に入ったときからとても雰囲気良くて、賑やかなんですけど、とても温かい雰囲気、なかなかいろいろな学校を見てもないと思うぐらい、この人数でこの温かい雰囲気というのはよくつくれたなという印象を私も持ちました。それがそのまま二岡中学校にも繋がっているということで、ぜひ私も他の学校で、中学校ではかなり他でも取り組まれているようですが、小学校でもぜひ広めていけたらいいかなというふうに思ったところです。

何かその点も含めて両校長、教頭からコメントがあればお願いしたいです。

羽矢尚史 二岡中学校校長

ありがとうございます。

私も本校に赴任して半年ちょっとが経つんですが、やはりSSTの効果というのは非常に大きいというのを感じております。本校に長い年数勤務している職員に話を聞きますと、やはりSSTを通して子どもたちが、自分が認められたということに対して自尊感情を高めることができているということを伺っております。それぞれがやっぱりお互いを認め合って、非常にそれが波及して、授業中の話合い活動がとても深まるんですね。それは学習面でも大きな影響を与えていると思いますので、ぜひ今後も本校で続けていきたいというふうに考えております。

古賀久美子 託麻東小学校教頭

ありがとうございます。

私も昨年度赴任いたしました。託東タイムは5年間続けてきている活動でございます。私も時々、子どもたちのようすを、託東タイムを見て回るんですけど、本当に生き生きと活動しております。とても楽しそうにしております。子どもたちがやはり落ち着いて、そしてやはり自分を認めてもらえているのを感じているからなのかなと思っております。

遠藤洋路 教育長

また、それに伴いまして、話し合い活動のほうもスムーズに授業中もできてきているところですよ。これを授業の中でも価値づけをしていながら繋げていき、また今後も継続して続けていきたいと思っております。ありがとうございます。

ありがとうございます。

託麻東小で給食をみんなで取りに行っている様子を見ても、すごい大人数なんですけど、とてもみんな落ち着いて、整然と並んでいて、かつ別に抑圧されている感じではなくて、楽しそうにみんなで並んで給食を待っているというすごくそれが印象的でした。なかなかできないことだなと。もっと雑然としていてもいいのかなというふうに思いますけど、それができているのが1つはそのSSTの効果もあるのかなというふうに思いました。

小屋松徹彦 委員

私からは3点ほど、1点は小学校における教科担任制という問題です。意見交換会のお話をお話してみると、教材研究がしっかりできて、こだわりを持った授業ができるという、先生本来の部分が非常にこの教科担任制で発揮できているという印象を持ちましたし、これはやっぱり今後もできる限り教科担任制を広めていくという方向性はいいのかなというふうに感じました。

それから、フリーに動ける生徒指導主事の存在というか、この大きさというのをちょっと私、感じました。やはりいろいろな問題が学校内で起きたときに、それに対処するのが担任の先生とかということではなくて、フリーに動ける生徒指導主事の方がそこにフォローに入るという、こういう体制は非常に先生方の精神的な負担を軽くするという意味ではいいなと思っていて、それが二岡中学校できちんと機能しているということがよく分かりました。

それから、もう1点は先ほど西山委員がおっしゃってましたICTの活用の中で、確かに先生方もこれは結構習熟するのに時間がかかるかもしれませんが、その一方で、子どもたちの慣れることの早さというのを非常に感じましたけど、それでもやっぱり子どもたちの中には不得手とする、ICTの活用が不得手な子どもがいて、それに対するフォローがなかなか先生ではできていないという現状ですね。これもやっぱりそういった生徒がICTを使いこなせなくて、どんどん格差がついていく

	<p>ということはやっぱりこれは避けなければいけないでしょうし、そういったことからすると、少しのマンパワーが全体的に不足しているのかなと、学校の中で。そういうふうなことをちょっと感じました。</p> <p>以上です。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>マンパワーに関しては、やはり足りないという面が多々あるかと思いますが、校長、教頭からいかがですか、その点も含めて。</p>
羽矢尚史 二岡中学校 校長	<p>それでは、ICTにつきましては、やはり子どもたち同士で教え合う場面というのがまた今後も継続していけば、かなり効果は上がると感じております。ただ、やはりおっしゃるように、マンパワー、いろいろな支援員の方々が入ってくだされば、もっと効率良くいくんだろうなということを感じています。</p>
古賀久美子 託麻東 小学校教頭	<p>ICTに関しましては、担当のICT支援員の方が定期的には来てくださるんですが、本校も児童数も多いので、毎日使っている中ではいろいろなことがございますので、中学校と同じように、もう少し来ていただけるとありがたいなというふうに思っているところです。</p>
泉薫子 委員	<p>私から2点お話ししたいと思います。</p> <p>先ほどから話が出ておりますようなやはりソーシャルスキルを学校で育てるという視点を取り入れていたのが非常に感心いたしました。私、10年前に「ソーシャルスキルを学校で」という、これは平成21年に手に入れたものなんですけど、教育委員会で一度提案したことがございます。これを、それぞれバラバラにやって、挨拶運動ですとか、いろいろなソーシャルスキルに対しての取組を学校でやっているところはあるんですけど、目的を持って一貫していろいろな場面で、授業とか掃除とか給食とかいろいろな場面でそれを使っていくという全体でやるという視点が非常に大事なわけなんですけど。それを小中学校で連携して一貫した目的で、統一した目的でやれたというのが非常に有効だったなというふうに見学していて思いました。</p> <p>特に先生方の意識が、多分変わるんだろうと思うんです。そういうソーシャルスキルを先生方も身に付ける、子どもたちから学ぶこともできるんじゃないかというふうに見ていて思った</p>

んですけど、そういう視点をぜひこういうかたちでつくっていただいで全体に広げていただくと、両校の取組が全市に広がるのではないかなと思います。これは三重県がつくったものなんですけど、こういうものをつくっていただきたいなと思いで、ちょっとまた持ってまいりました。それが1点です。

もう1つは教科担任制について、1つはちょっと心配するとか、生徒と先生との繋がりがどの程度できるんだろうかというところが心配しておりましたが、見学しまして、やはり授業自体が非常に練れていて面白かったというのもあるし、子どもたちのことも本当にしっかり把握していらっしやって、自分の担任じゃない生徒の状態も非常に先生たちが把握していらっしやって、非常にそういう点で感心いたしました。感想です。

出川聖尚子 委員

先日お伺いして、ソーシャルスキルトレーニングを導入されているということで、授業の中での話合いの場面とか、6年生の授業を参加させていただきましたが、6年生が間違えているかもしれないから遠慮するとかいうこともなく、積極的に手を挙げていて、また先生も間違えた答えに否定的な言葉ではなく、「また次、間違っても発表しよう」と思うような声かけをされているところがとても印象的でした。ソーシャルスキルが授業や生活の場面で生かされていると思いました。

あと、教科担任制のことをお聞きして意外だったのが、図工とか家庭科とかは評価がしにくいということでした。一定の評価基準ではなくて、その先生の判断になるので難しいとお聞きしたんですけど、その難しさが何かを共有して、どのように解決できるか中学校と連携して進めていかれるといいのではないかとお聞きしながら思いました。

遠藤洋路 教育長

今、お2人ともソーシャルスキルトレーニングと教科担任制ということでしたけど、どうでしょうか。校長からご意見、何かあれば。

羽矢尚史 二岡中学校
校長

特にこの2校小中学校につきましては、9年間を通してそのように取組ができているということで、非常にやっぱりそれは強みだと感じています。ただ、ソーシャルスキルトレーニングについては、いろいろな中学校でいろいろな形式でやっていますので、我々もそういうものも見ながら、学ぶべきことはしっかり学んでいきたいということを感じています。

古賀久美子 託麻東
小学校教頭

また、来年の2月10日に2校で自主研究発表会を行いますので、ぜひそのときにもお越しいただいて、またご意見をいただければありがたいです。

教科担任制についていろいろご意見をいただきありがとうございます。どうしても小学校は学級担任制ですので、昨年から本校も教科担任制を一部導入し始めて、まだまだこれからです。昨年に比べると、今年度はやはり今の6年生は昨年度2学期から体験していますので、随分スムーズで子どもたちも慣れてきたなというところでは。

学級担任制に比べて教科担任制、初めはいろいろなデメリットの面も担任も感じておりましたが、やはり先ほどからご意見いただいたように、みんなで全部の学年の子どもを見るという体制ができてきました。子どもたちも教員も、それぞれ馴染んできたところでございます。

先ほどいただいた教科については、まだまだ課題もございしますので、中学校とも連携してまいりたいと思います。ありがとうございました。

遠藤洋路 教育長

両校が小中一貫校ということで、一貫のカリキュラムでやられていると思うんですけど、今の教科担任制も含めて、何か小中一貫になったことで変わったこと、その効果というか、学びとか、そういうところはいかがですか。多分それは中学校の方が感じられるのかもしれないですけど、そこについて何か教えていただけますか。

羽矢尚史 二岡中学校
校長

それでは、いろいろな面であるんですが、例えば生活様式あたりは両校揃えていますので、非常にスムーズに入学して生活することができています。

それから部活動、こちらも連携ができていますので、中学校に入ってから非常にしっかりと力をまたさらに付けていきやすいかたちができているというふうに感じています。

教科につきましては、ご指摘いただいているように、これからしっかり連携を深める余地があると思いますので、しっかりやっていきたいと考えております。

西山忠男 委員

先ほどマンパワーの話が出たんですけど、マンパワーでいいますと、やはり一番問題なのは特別支援だと感じました。託麻

東小の担当の先生にお伺いしたら、支援を必要とする児童が急速に増えているということで、入学前の相談が倍増している、それから特別支援の在籍数が5年前は13人だったのが現在35人、とても手が足りませんというお話でした。これなかなかすぐ教員を手当てするというのは難しいと思いますので、通常学級の教員の特別支援のスキルを高める努力がやはり必要なのかなと、そうしながらできるだけ増員をお願いしてということしかないのかなということを感じました。

ただ唯一の救いは小中一貫ですので、人間関係が変わらないまま上がってきます。それから学校間の引継ぎもやりやすいということで、その点は良いのかなという、小中一貫の良いところがあるのかなというふうに感じました。

以上です。

遠藤洋路 教育長

唯一の救いという程でもないでしょうけど。正規の教員は、児童生徒数が増えれば増えるので、国からも定数が付くのでいいんでしょうけど、むしろそれを支援する、サポートする人が足りていないということなのかなというふうにも思いました。

これはもちろん、この両校だけの問題ではなくて全体的な問題ではありますけど、やはり特別支援、あるいは特別なサポートを要する子どもが非常に増えていて、通常学級の中でも増えていて、どこでもそういった子どものサポートで手がいっぱいだという話は聞いています。それは教育委員会としても大きな課題だと思っていますので、今までは少しずつになっていますけど、増やせるようにはしています。ちょっと抜本的に増やしていく必要があるのかなというふうに思います。

苦野一徳 委員

ずっと訪問を楽しみにしていたんですけど行けなくて、残念で。申し訳ありませんでした。

でも、こちらを読ませていただいてお話をお聞かせいただく中で、本当に素晴らしい学校なんだなというのを感じさせていただきました。

2つ私もお尋ねしたいなということがありまして、1つはICT活用なんですけど、熊本市、いつの間にかICT先進地域になって、先生方も急速だったと思いますけど、かなり慣れていらっしゃると思いますし、子どもたちも慣れていていると思うんですが、やはり全国状況を見ると、ついていけない先生、あるいは心配なことたくさん出てきて、特にSNSに子どもた

ちが常時接続することによるいじめのあり方が少しずつ大人の目から離れやすくなっているだとか、あと授業中にいろいろなことができちゃうとか、いろいろと先生方が心配なこともあるんじゃないかなと思うんですね。そこを率直に、こういった支援があると、もっとICT活用がスムーズに、より意義深くなると。だからといってICTから撤退するという選択肢はありませんので、現代社会における必須の道具を、ちゃんとリテラシーを持って使いこなすということが教育にとってとても大事なことだと思うので、じゃ、どのような支援があれば、こういったことがちょっと心配だ、子どもたちは大丈夫なんだろうか、子どもたちの安全を守るんだろうか等々も含めて、あればぜひお聞かせいただきたいというのが具体的なところで1つです。

もう1つは、先ほど小中一貫の意義というお話があったんですけど、子どもたちやあるいは先生同士の交流、小中の授業を通したり、あるいは授業外でも、先ほど部活のお話もありましたが、そういった交流がどれくらい進んでいるのか。またあったとしたら、どんな良さがあつたり、まだ不十分だと感じられるところがあったらどんなふうに展開できるのか等々、すみません、たくさん質問があつて覚え切れないかもしれないですが、お答えできる範囲で教えていただけたらと思います。

遠藤洋路 教育長

大きく言うと、ICTとそれから小中の交流ということですかね。両校からどうぞ。

羽矢尚史 二岡中学校
校長

まず、ICTにつきましては、情報モラル的なことを積み重ねて指導していく必要を感じるんですよね。学校でももちろんやっていますが、いろいろな側面でそういうノウハウをまたいただければ、またいろいろな講師の先生あたりを派遣いただければありがたいです。

それから、小中の交流ですが、残念ながら今年はコロナ禍で実際の対面ができておりません。オンラインではもう交流が1回できておりますが、コロナが開ければ、また実際に顔を合わせながら教科の話も含めながら、いろいろな交流を進めていければ、また子ども一人一人の情報交換もかなり密にできると思うんですよね。それをこれから期待したいと感じているところです。

古賀久美子 託麻東
小学校教頭

ありがとうございます。

ICTにつきましては、中学校と同じで、やはり小学校も情報モラルの教育が大事であり、リテラシーの教育も大事なので、並行してやっていかなければならないところですが、まだなかなかその辺りはできていませんので、やはり学校内だけではなく、いろいろな専門知識を持った方々と連携しながら、そういう支援がいただければありがたく、進めていきたいと思っているところです。

小中一貫の小学校と中学校の連携というところですが、私も昨年度来たときには第1回目の校内研修の時には一緒に中学校で、一緒に校内研修をしたことがありました。お世話になっている名城大学の曾山先生をお呼びして一緒に研修できたのですが、それからコロナの関係で第2回目はオンラインでしたところ。

ただ、小中一貫のプロジェクトチームをつくってそのメンバーは定期的に小まめに情報交換しながらやっているところです。また小中連携の日なども活用しながら進めていきたいと思っております。

苦野一徳 委員

小中一貫に関して、できたら素敵だなというのが、日常的な小中の先生方の交流ももちろんなんですけど、子どもたち同士の何か交流の機会もできたら素敵だなと思って、それこそ総合学科、学年を超えて、小中を超えてやるとかも本当に楽しんだろうなと。やはりお兄さん、お姉さんの姿を間近で見られるって、これほど成長することはありませんよね。二、三年先の自分の姿だし、お兄さん、お姉さんも、子どもたちの前に立ったときって本当に大きく成長しますよね。小中一貫だからこその意義を授業でも、授業外だけじゃなくて授業でも一緒に連携してカリキュラムをつくれたらいいなというのを小中一貫では特に思うので、何か工夫ができれば素敵だなというふうに思いました。ありがとうございます。

遠藤洋路 教育長

授業で他の学年と一緒にというのは、例えばどんなことをイメージされているんですか。

苦野一徳 委員

一番手っ取り早くできるのは先ほどの総合ですよ。例えば地域の課題解決プロジェクトをやるにしてもそうでしょうし、小中一緒に何か作品をつくる、映画をつくるとか、お芝居をつ

	<p>くるとか、いろいろなものがあると思うんですけど、そういった総合を中心に教科横断的なカリキュラムマネジメントをして小中でやっていくというのは1つ、学校ぐるみでできるので、すごくいいと思うんですよね。</p> <p>あと、どんどん進んでいけば、教科でも小中で同じ場所で、何かそれぞれが学んでいることは違うんだけど、中学生になったらこんなことをやるんだな、みたいなこともちょっと横目で見えたり、同じ場所で何かそれこそ個別最適な学びが行われて、何か分からないことがあったら、中学生のお兄ちゃんにちょっと聞いてみるとかいうのができたりとか、そういうところまでできたらすごいなと思うんですけど。ゆくゆくのそういった学びの場での異年齢、異校種間交流というのができたら素敵だなと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。ありがとうございます。</p> <p>大体時間的にもそろそろ最後なので、もし他の委員からのコメントがなければ、両校の校長、教頭から、少し今日の話も含めて、あと当日のことも含め、あるいは日頃のことも含め、何かご発言があればお願いしたいと思いますが、いかがですか。</p>
羽矢尚史 二岡中学校 校長	<p>今、苫野委員さんからいただきましたお話ですが、実は小中連携して史跡巡りというのは毎年行われているんです。中学生が小学生を案内して、二岡中校区は非常に素晴らしい史跡がたくさんありますので、そういうのを子どもたちに教えるということではできております。</p> <p>さっきちょっとマイクが入っていなかったのもう一回言わせていただきますが、来年の2月10日に託麻東小学校と二岡中学校の自主研究発表会がございますので、SSTあたり、また名城大学の曾山先生も来られますので、ぜひお時間があられる方はお越しいただければと思います。今日はありがとうございました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>誰向けの「来て」なんですか。ネット配信を見ている方とかですかね。</p>
古賀久美子 託麻東 小学校教頭	<p>研究発表会については、どうぞよろしくお願いたします。そのときに託東タイムと二岡タイムを公開いたしますので、ぜひまた見に来ていただければと思います。</p>

遠藤洋路 教育長

今日は本当にたくさんお褒めいただきましてありがとうございます。ソーシャルスキルトレーニングのこと、あと一部教科担任制のこと、いろいろ課題もまだまだありますが、学校の雰囲気も見ていただきながらいろいろご意見をいただきました。今後、また今日いただいたご意見を学校で生かしていきたいと思っております。また今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございました。

本当に他の学校にもモデルになるような取組だったと思いますので、ぜひ教育委員会としてもそういった取組が広がるように支援していきたいなと思います。貴重な機会をありがとうございました。では、引き続き頑張ってください。

日程第5 報告

・報告（1）千原台高等学校及び総合ビジネス専門学校改革に係る教育課程の編成等について

《松永直樹 学校改革推進課長 報告》

遠藤洋路 教育長

前回からの主な変更点は学科名とそれから教育課程の一部ということでしたが、いかがでしょうか。

西山忠男 委員

夜間部は現行、OA経理科が20名ということですが、夜間部については今検討中というお話がありましたけど、定員についてはどれぐらいの予定なんですか。

松永直樹 学校改革推進課長

夜間部のあり方につきましては今、様々検討を行っておりますが、例えば短期集中的に開催をするような、広く市民の皆様が受けやすいような授業の設定等も検討しております。特段前提なく検討を進めたいというふうに考えております。ですので、科目によっては幅広くご参加がいただけるような形式も設けたいというふうに考えておりますし、逆に今現在行っている資格取得のようなものについて、通年で開設するようなものも考えております。

また、例えば千原台高校におきましては、商業系の科目を設けておまして、必要な資格取得もそこで行っておりますが、さらにそこで高校で教えている範囲を超えて学びたいというよ

	<p>うなニーズがあるのであれば、総合ビジネス専門学校でも対応できないか、総合ビジネス専門学校の生徒と一緒に学ぶことができないか等、様々活用の方法はあろうかと考えておりました、大変申し訳ございません。詳細まで詰め切れておりませんが、そういったことを今考えているところでございます。</p>
西山忠男 委員	<p>やっぱり市民のニーズを把握するというのが一番大事だと思うんですけど、現状ではこの夜間部の倍率はどれぐらいあるんですか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>倍率につきましては、夜間部においては令和3年度は0.35倍ということで、大変厳しい状況でございます。</p>
西山忠男 委員	<p>夜間部は資格が取れるんですよ。資格が取れるというのはやはり魅力だと思うんですけど、それほど倍率が低いとなると、やっぱりちょっと考えないといけないと思います。</p> <p>ちょっとお話をされた資格と関係ない一般的な勉強ができるという課程ですと、放送大学という選択肢もありますので、これまた人が集まるかというのはちょっと厳しい感じがありますので、もう少しやはり市民のニーズを考えたいというふうで計画したほうがいいかなという印象を受けました。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>西山委員のご指摘は本当にそのとおりだというふうに思っております、我々としましても、商工会議所、民間の各団体を含めてご意見を伺うと同時に、アンケート等も行うようなことも今、検討しております、そういったことで広くニーズを拾うようなことを考えたいというふうに思っているところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>古家校長から何かありますか。</p>
古家幸生 総合ビジネス専門学校校長	<p>夜間の方は一般課程でございまして、定員20名に対して現在8名が在籍しておられます。全員、社会人の方です。8名のうち6名が既に仕事を持っておられる大人の方、残り2名が高校の新卒でアルバイトをしながら学校に通われている方になっております。</p> <p>学習内容としましては、日商簿記検定の3級、2級、それからOffice系のソフトウェアである、Word、Excel</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p> <p>西山忠男 委員</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>l、PowerPoint、Access等の学習を行っております。夜6時半から9時半までの授業時間となっております。</p> <p>西山委員、よろしかったですか。</p> <p>はい、分かりました。</p> <p>他にいかがでしょうか。よろしいですか。 では、他になければ本件は以上といたします。</p>
<p>・報告（5）必由館高等学校改革に係る学校提案について</p> <p>《城野実 必由館高等学校校長 報告》</p>	
<p>遠藤洋路 教育長</p> <p>南弘一 千原台高等学校 校長</p>	<p>ちょっと戻りますけど、報告（1）で、ビジネス専門学校の校長にお話は聞きましたけど、千原台の校長から何もコメントをもらっていませんでしたので、せっかくですすからいかがですか。</p> <p>新しい学科名と教育課程の一部修正の所管課の報告をいただきました。コース名については、説明がありましたように、アンケートも取りましたし、校内で学科・コース名選定委員会というのを臨時につくりまして、管理職プラス各学科主任等8名、それから生徒会役員8名、8名と8名の16名で話し合いを行いました。そこで様々な意見を聞いた中で、学校としての意見を教育委員会に上げさせていただいて、それを基に決めさせていただきました。</p> <p>やはり子どもたちは、自分たちが今、学んでいるところに愛着がありますので、健康スポーツ探究科については、健康スポーツという呼称に馴染んでいるということ、そしてまた、この教育委員会の会議の中でも、実際、健康面にも焦点を当てて学習を進めていきたいということで、こういった学科・コース名に落ち着いたところです。</p> <p>あと、教育課程については、今現状の生徒たちのちょうど進路が明らかになってきているときでして、将来の健康スポーツ探究科を卒業していく、いわゆるスポーツ特待生というようなかたちで、関東・関西の大学の体育学部がない学校にも、そう</p>

	<p>いったかたちで行く生徒がおります。東京6大学あたりです。そういった生徒への対応も考えながら、具体的に少し教育課程を見直しながら。本校では男子ハンドボール、ゴールキーパーの岩下祐太選手、本校から早稲田大学を経て、今、日本代表で東京オリンピックに出ている卒業生もおります。そういったコースをしっかりと残すということも踏まえて教育課程の見直しをさせていただいているところです。まだその辺はちょっと精査ができていないところもございますので、今後しっかりと精査していきながら取り組んでいきたいというふうに考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。 必由館高校は今、案の説明はありましたけど、校長から何か説明以外で今回の学校の中でのプロセスとかを踏まえたコメントがあれば、全体的な感想でも結構ですけど、お願いできますか。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>今回、生徒、同窓会と話していく中で、やっぱり個人的な思いはそれぞれいろいろな意見が出てきました。その中で、この時期にこの学校の案を出していくという中で、ここのこういうかたちは納得できるかという部分を丁寧にやっていったんですけど、自分の学科の名前を残してほしいという思いが出てきたりするところで、やっぱりじっくり話が必要だったなと思っておりました。 具体的なこの改革に対する探究の授業に取り組むこととか、そういうことに関しては生徒も職員もしっかり前向きに今考えておりますので、今後それについてはしっかりこちらの方からも、今、2学期になって4回ほどその探究の研修も入れております。先生たちの気持ちも充実してきておりますので、この方向性でやっていけたらと思っております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。 では、以上を踏まえまして、各委員の皆さんからご意見、ご質問等があればお願いいたします。</p>
西山忠男 委員	<p>先ほど教育長が千原台の校長先生に意見を求められたので、それを聞いて、ちょっと感じたのは、情報ビジネス探究科というのが、ビジネスが入ることによって総合ビジネス専門学校と</p>

<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>の区別が分かりにくくなったような気がするんですね。総合ビジネス専門学校の方はキャリア創造学科という名前になるので、いいのかなと思う反面、ちょっと何か教育内容が似たような印象を受けて、お互い特色が出しづらいんじゃないかなという印象を持ったんですけど、その辺はいかがでしょうか。</p> <p>名称につきましては、先ほど千原台校長からもご説明がありましたように、学校内で十分に議論していただいたものというふうに思っております。</p> <p>一方で、先ほどおっしゃられましたビジネスというワードですが、我々、市立学校間の連携というものも非常に重視をしております、ビジネス専門学校、そもそも高校課程と専門学校課程ということで、課程こそ違うものの、実際は同じく簿記に取り組むとか、商業系の科目を様々取り組んでいく、もしくは授業についても高校段階から少し、例えば両校ともに起業家の皆さんと触れ合っていただくようなことも予定をしながらプランニングをしております。</p> <p>また、お互い西区にあるということで、地域活動にもこれまでも積極的に関わっていただいております、西区役所からも、そういった取組については大変感謝をいただいているようなところがございます。ですので、逆にそういった連携という部分はプラスになるのかなというふうに私たちは考えておまして、少し分かりづらいというところは確かにあるかもしれませんが、我々はそこを強みとして取り組んでいきたいというのが今の考えでございます。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>その繋がりを取って示すためにも、ビジネスというのが両校に入っているという面もあるということですかね。</p> <p>実際問題、間違えるということはないでしょうけど、どっちで何ができるのというところが、中身が紛らわしいという面は確かにあるのかもしれないですね。でも実際共通している面もあるわけですね。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>先ほど申しあげましたように、簿記あたりの資格取得でございますとか、起業についても両校が取り組んでまいりますので、教育課程についてもかなり似通った部分がございます。そういった中で我々が考えているのは、全ての千原台高校の生徒がビジネス専門学校への進学を希望するわけではないんですが、い</p>

	<p>かに高校課程と専門学校課程、3+2の5か年間で、若しくはさらにそこからの大学編入を加えますと、さらにプラス2年間でどういった学びが提供できるかというのも市立ならではの強みを出せる学校になるのではないかなというふうに考えておりますので、一部重複する科目があるのは事実ですが、さらにそこにプラスの価値を付与するということで、市立学校ならではの取組を進めていきたいというふうに考えているところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	西山委員、いかがですか。
西山忠男 委員	はい、分かりました。 千原台高校の情報ビジネス探究科の卒業生がビジネス専門学校へ進学するというようなケースを主として考えているということですか。主としてではない。あり得るという程度ですか。
松永直樹 学校改革推進課長	現時点で、主として考えているということではございませんが、西区にある学校ということで、連関することも多いと思いますし、当然商業系の授業を行っておりますので、千原台高等学校で、例えば簿記3級、2級を取った生徒が、総合ビジネス専門学校でさらには1級を目指して取り組むとか、そういった繋がりのある取組を進めたいというようなことを今考えているところです。ですので、全ての生徒ということでは当然、定員の関係もございまして、様々な生徒の進路選択がございまして、そこを目指しているところではございませんが、十分にそこは繋がりを持った教育課程の提供ができるのではないかなというふうに思っているところでございます。
遠藤洋路 教育長	その連携とか接続をこれまで以上に意識した教育課程にするということだと思いますが、実際問題、千原台高校の卒業生の大半が総合ビジネス専門学校に行くわけではないと思いますが、そこは何か優先的に行けるとか、何かそういう仕組みは考えているんですか。
古家幸生 総合ビジネス専門学校校長	現状としましては、今の1年生ですけど、定員70名に対しまして千原台高校から5名、それから必由館高校から6名ということで、市立高校から11名入学をしております。 入試に関しましては、今年度から指定校推薦を行っておりま

	<p>す。その中で、千原台、必由館高校に枠を設けております。今後、これは学校としての案ですけど、市立高校推薦を実施し、市立2校から優先的な選考ができるような入試も考えております。</p> <p>先ほど課長から簿記のことがありましたけど、他に例としましては、例えば千原台高校でプログラミングの基礎を学んだ学生が本校に入りまして、ドローンに自分で組んだプログラムを与えて自動制御するとか、そういった発展的な学びも想定しております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>敢えてそこの繋がりを意識するためにもビジネスという言葉を入れているという面もあるのかなというふうに思いますけど、いかがですか。</p>
西山忠男 委員	<p>やっぱり出口が大事なので、千原台高校を出た後、どういうところに就職できるのかと、さらにそのビジネススキルをつけるためには専門学校まで行けば、さらにもっとどういうところに行けるのかとか、そういう展望をやっぱり示す必要があるんだろうなと思うんです。そこのところをもう少し明確にしていただければと思いました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。これからまだ検討しますので、その中でもそれができるようにしていきたいと思います。</p> <p>では、すみません、先ほど少し千原台高校、総合ビジネス専門学校に話を戻しましたが、必由館高校の方に移ってよろしいですか。</p> <p>では、必由館高校の学校の改革案ということで学校提案をいただきましたけど、これに関してのご意見、ご質問等ありましたらお願いします。</p>
苦野一徳 委員	<p>簡潔な学校提案をいただきまして、どうもありがとうございました。具体的にはまたいろいろとみんなで練り上げていけたらいいなと思うんですけど、ちょっとその前段として、私も千原台高校の頼もしい生徒さんたちとはいろいろお話ができて、とても楽しかったんですが、必由館高校の生徒さんたちとは話ができなかったものですから、空気感というか、雰囲気というか、ちょっとお聞きしたいなと思って。</p> <p>先ほど校長先生も、いろいろな人たちとの対話を設けている</p>

	<p>色々な発見があったということをおっしゃっていただいて、そのこと自体はとて面白い機会だったんじゃないかなというふうに拝察するんですけど、こういった案を練り上げていく過程で、すごく前向きなワクワク感があったのか、それとも何か下りてきたものを、いなそうというか、変な言い方ですけど、空気感をちょっと。というのは、ここでまさにあるように、生徒が中心、あるいは先生たちみんなと一緒に自分たちの学校を自分たちでつくるというのがこの改革のとても大事なポイントだと思うんですよね。つまり、自分たちの学校は自分たちでつくるという、そういう志というか思いというか、そういった雰囲気ができるということがとても大事で、実際に生徒さんにここに来ていただいて、会長に来ていただいて、そういったエネルギーをすごく感じたんです。すごく良い雰囲気を私は感じ取ったんですけど、その辺、何か失礼な言い方かもしれないんですが、どういう空気感があられたのかなというのを、まず前提としてお聞かせいただけますか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>私もまた失礼な言い方になりますけど、教育委員会の案を見た中で、先生、生徒たちはやっぱり今の必由館高校の満足感、必由館に来たという自分たちのニーズとかを考えた中で、そこに戻すためにとても積極的に活力ある発言をして、思いというのは、今のだけじゃ駄目と、ちゃんと探究とかもやっていくというところでの議論にはなりました。それに関しては、2月に出た案に対して、やっぱり自分たちで考えて、その結果として、ここまで来たんだから、自分たちもやっぱり一生懸命考えているというのとは当然あって、その中で考えている色々な意見を言ってくれた生徒たちでした。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>今までのというか、前回の生徒の意見では、今までの必由館高校がいいと、改革する必要はないと、これまでどおりにしてくれという意見だったかと思うんですけど、今の校長の意見だと、そこからは変わったということなんでしょうか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>そこから、やっぱり教職員として、今の時代の流れで変わっていかなくてはいけないということを、話をしていく中で、生徒から理解していただいたということだと。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>なるほど。そこは、先ほど苦野委員が言ったように、前向き</p>

	<p>に変わったというよりは説得されたという感じなんですか。そこはなかなかニュアンスは難しいかもしれませんが。最終的には、このような方向だったらいんじゃないかということでもとまったということですよ。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>本当に最初に説明したように、やっぱり三者三様の思いがありますので、それぞれの大事にしたいことを伝えていく中で、この案に納得解として出てきたということではないです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>じゃ、それぞれの主張が100%反映されているわけじゃないけど、最大公約数的にこれというそういうイメージでよろしいですかね。分かりました。</p>
西山忠男 委員	<p>私は生徒さんたちと懇談して、普通科を残してほしいという希望は非常によく分かりました。その最大の理由はやはり理科系にも進学できる、多様な進路先が確保できるということだと思います。それでこういう案が出てきて、私は理解できます。</p> <p>ただ、3ページの普通科の内容のところ、普通探究コースで3年次に、進路の希望や興味関心等に応じてクラス分けということが書いてありますけど、ここところがやっぱり一番重要だと思うんですね。どんな進路を想定してこういうクラス分けをするのか。要するに出口戦略ですよ。そこを明確にして実績を積み上げていくということが大事だろうなと思うんですよ。理科系だったらどれぐらいのレベルの大学を目指すのかとか、どういう進路なのか、国際探究はどうなのかと、その辺をもう少し今後詰めていただく必要があるんじゃないかと思います。特に普通科になりますと、どうしても特色を出さないと、今後、少子化でどんどん希望者が減っていきますので、そういう中でも倍率を維持できるような内容にしていく必要があるのではないかと思います。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>今、西山委員に言っていたとおりでと思いますので。自分たちの中でも、今、想定しているのに、やっぱり近年うちから公務員に受かっている子たちもいるので、類型として、公務員に関しても、実は市役所の11月5日に学校訪問がありまして、その中の英語の授業の中で、英語の教科書にある題材を市役所職員から地域の課題として、今こういうことなんだということを日本語で説明していただいて、またそれを地域の課題</p>

	<p>として取り組んだと。やっぱりその子たちが、こういうことを市役所がやっているのなら自分も高校から卒業して直接行きたいと思った子と大学で専門的なものを学んでいきたいと思った子がいたりしたんで、そういうふうないろいろな場面でそういう探究学習をやっていきながら本人たちが大学進学後なのか、高卒で直接なのかというのも十分考える時間を与えながら対応していこうとは思っておりまして、詳細については今後検討していきたいと思っております。</p>
西山忠男 委員	<p>あと、細かい問題ですけど、3年次のクラス分けがうまくいくかどうかというのが、これはちょっと技術的な問題があると思います。理系希望者が例えば10人しかいなかったと、それで1クラスつくるのかとか、いろいろな細かい問題が出てくると思いますので、その辺、柔軟に対応できるようなシステムにしていだければと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今の部分で少し説明を聞きたいところがあるんですけど、この普通探究コース、芸術探究コースと生活探究コースは名前として何となく分かるんですけど、普通探究コースというこの名前はどういう意図とかイメージを持った名前なのでしょうか。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>現段階では本当に仮称ということで、生徒たちが普通科の普通にこだわったので、結果的にこういう名称にしておりますけど、一応、未来探究とか夢探究とか、いろいろなかたちがあるのかなと思っています。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>科の名前は普通科ですが、普通探究というのは何か特にそこに深い意図があるということではないわけですか。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>本当は幅広い進路選択をしていく中で、本人たちがいろいろな探究、深い学びをしていく中で、先ほど言ったように高卒で就職するのか、大学に行くのかというそういうところも丁寧にやっていけるようなコースと想定しています。ですから、いろいろな学びをしていく中で、最終的にどういうところを受験していくという出口をどこに繋げるというところで、未来探究なのか、この後のアンケートとかそういうところで決定していけばいいのかなと。内容としては、幅広い進路選択ができる</p>

遠藤洋路 教育長	<p>という意図で、普通探究という名前をつけております。</p> <p>元々のこの改革案を議論したとき、苫野委員が当時、委員長でしたけど、どういう人を育てたいのかという観点で議論をしていったわけですね。普通科じゃなく、別の名前にしたという理由としても、どういう人を育てたいかという観点から議論したわけで。普通科、普通探究って別に普通の人になりたいというすごい強い意思を持っているとか、そういう意味ではないんですよね。では、ここの普通というものに込めている意味というか、こだわりというのはどんなところなんだろうかね。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>先ほど説明したように、あまり深いこだわりが今回はありません。生徒が普通科ということにこだわっていたので、中に出てきたのがその段階で普通探究だったと、ただこれはあくまでも仮称だから、今後、話合いの中に参加していこうということで、名前に私がそこまでのこだわりを持たずにここに提案しているというのが実情です。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>すみません、私が聞きたかったのは、生徒さんが何で普通科とか普通という名前に強いこだわりを持っているのかといえ、それは普通の人間になりたいという意味ではないだろうと推測するので、だとしたら、どういうことで普通科という名前を強く残してほしいというふうに思われているのかということです。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>報告1の一番最後に付いているような生徒たちと教育委員さんと話し合われたときの中にも、この進路の選択の幅を広げるためと2番目に書いてあったりするように、4番目にも普通科は幅広い進路選択が可能という部分で、今の生徒たちが高校受験のときに意識しているのが工業高校、商業高校とかいうと、そこに決まってしまう、将来が幅広い選択じゃなく、ある程度の方角に向かっていくという意図で多分生徒は使っていて、普通科に行けば、まだそこでしっかり考えている色々な方向に進めるという言葉が生徒の知識としては普通というのがそれが一番表現しやすい言葉だったということだと。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>色がついていないというか、幅広いというそういうニュアンスだということですかね。分かりました。</p>

<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>あともう1点伺いたいのは、36人という人数の設定はどういう意図なのかということも教えていただけますか。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>36人については、生徒案の中にあつたように、クラスの中で奇数だった場合、全員出席したときにペア学習とか、そういうときに不憫な子が出るんじゃないかとかいうところで36というのが2、3、4、6といろいろなかたちで割り切れる数字だったので、生徒の中で出てきた数が36という数字だったということです。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>班をつくりやすいということですかね。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そうです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>分かりました。 その他、委員の皆さんからご意見、ご質問等がありますか。特にありませんか。 小屋松委員、何かご感想とかありませんか。</p>
<p>小屋松徹彦 委員</p>	<p>中身をまだここに来てから拝見したぐらいでしっかり見ていないので何とも言えませんが、今の36人については、私は数字の根拠は分かりましたが、少人数のクラス編成だったら、もう少し少ない数が出るのかなと思ったんですね。40人からだと30人クラスとか、そういう生徒からの意見が出るのかなと思ったら、そうでもなかったもので、ちょっと意外な感じがしました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>あまり少人数になるよりも、例えば24人とかよりも、36人とかある程度の人数がいたほうがいいという、そういうことなんでしょうか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>最初に生徒会長がこれを上げたときに、やっぱり部活動とかそういう活動をしていく生徒数が減ることに対する不安感とか、そこが大きくありましたので、30とか24とかいう数字にはしていないというのはもうそこです。ですから、40のままでもよかったんだけど36という数字になったというのが現状です。</p>

遠藤洋路 教育長	では、これは主に部活動の活力とかそういう面で、全体の人数を減らしたくないというそういう趣旨なんじゃないかな。
城野実 必由館高等学校 校長	そうですね。もうその点については、全体の数を今のうちの倍率がある中で全体の数を減らすことはちょっと避けたい、そこでもっとこの人数でニーズとして来てもらえるんじゃないかという期待値がまだある部分で、これ以上少なくするというのは学校としては判断しませんでした。
遠藤洋路 教育長	クラスの人数を少なくしてクラスの数を多くするという選択は考えなかったんですか。
城野実 必由館高等学校 校長	教室の数が限られている以上は、クラス数を増やすというのはちょっと考えられなかったもので、増改築していただければ、その案のほうが学校としてはありがたいんですけど、そこはちょっと頭の中から消えておりました。
遠藤洋路 教育長	分かりました。全体の人数をできるだけ維持したいと、そういう趣旨なんですね。分かりました。
西山忠男 委員	9ページの市立ならではの特色ある学校の5番目に、多様な生徒の受入れということが書いてありますが、その中に、校内での支援体制を強化する、障がいを持つ生徒等への指導・支援の拡充とありますが、これは例えば障がいを持つ生徒の受入れ枠を設けるとかそういうことでしょうか。どういうことをお考えでしょうか。
城野実 必由館高等学校 校長	別に受入れ枠を準備するというものではなく、「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」の中で、入試を通ってきた場合に、高校でも看護師をつけるとか確かそういうものです。病気とかそれで通えないということは、この新しい法令上、厳しいのかなというのもあるので、そのときにはやっぱり看護スタッフとかそういうものを、成績が良くというか入試の合格ラインにある子が入ってきたときに、そういうふうな対応を今後していくのではないかなという言葉だと思っています。
遠藤洋路 教育長	合理的配慮ということですか。

城野実 必由館高等学校 校長	合理的な配慮とは別に、来年度からだったか、何かあったと思うんです。病院のスタッフとかそういうものを雇って、先生たちに負担をかけないようなかたちで学校にそういうのを高校でも入れていくみたいなのが、要望があった場合というのがあったと思いますので、今後そういうところの準備も必要なのかなと。
西山忠男 委員	そういう条件の生徒さんを積極的に受け入れるということがあれば、それはそれで大きな特色になると思うんですけどね。もちろん、そういう体制をつくるのは大変だと思いますけど、ここに書いてあったので、ぜひ前向きに考えていただければと思います。
遠藤洋路 教育長	他にご意見はよろしいでしょうか。 今の点でいえば、確かに市立ならではの特色ある学校ということと普通科ということがどう両立するかというのは大きなテーマになるかというふうに思います。普通科だったら県立でいいじゃないのという声が出た場合に、いかに説明していくかということが、最大とまでは言いませんが、非常に大きな論点になるのかなというふうには思います。 その点は例えば生徒とか、あるいは教職員でも結構ですけど、県立との違いという観点ではどんなふうに考えているのかというのを聞かせていただけますか。
城野実 必由館高等学校 校長	現在の必由館高校に対して、県立の校長先生たちといろいろな話をしていく中でも、普通科普通に関してはどこにでもあるのかもしれませんが、国際コース、芸術コース、服飾デザインコースという部分ではっきり特色ある学校であるという認識はいろいろな先生方から言っていた部分があるので、全てが、特色がある必要はなく普通科として幅広い進路選択ができるところも残したうえで、しっかり市立らしいというのを学校としては考えています。
遠藤洋路 教育長	そういう特色あるコースと普通のコースが一緒に両方あるというのが1つの特色だというそういう考え方ですかね。分かりました。 まだご発言がない委員もいかがでしょうか。

<p>泉薫子 委員</p>	<p>私は、生徒が、自分たちが積極的に関わってつくっていくとかたちで決まっていけばいいなというふうに考えているところで。そういう意味では、こういうふうに生徒や皆さんの意見と教育委員会の考え方というのをずっと擦り合わせてつくっていくんだろうなと思って見ているところですけど、1つ気になっていたのが、この最初に提案していた中学校、併設中学校についてが非常にやはり否定的なといいますか、これについてはもう一度見直してもらいたいというような意見が随所に見られるということについて、どのように考えていけばいいかなというのをずっと考えていたところなんですけど、教育委員会としては今どのように考えているところなんですか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>現時点におきましては、附属中学校の設置の利点というのは十分にあるものというふうに考えております。基本計画を策定する前に検討委員会でも様々なご意見をいただきましたが、その中でもワークショップで附属中学校設置について積極的なご意見が出ましたりとか、アドバイザーから附属中学校のメリットについてもご助言いただいたりとかそういったものがございました。ですので、メリット自体はあるというふうに思っております。</p> <p>一方で、必由館高校におかれましては、やはり生徒数の減少というのに大変危機感をお持ちというのも事実としてあって、先ほど生徒会長のご意見も城野校長が述べられましたけど、部活動をはじめとした学校の活力が損なわれるのではないかとといった点、我々としては様々な取組を行うことによって、その点の不安の解消ができるのではないかなというふうに思っておりますが、学校としてこういったご意見を頂戴しておりますので、その点についてはしっかり応えられる準備といたしますか、協議、それを行っていきたいというふうに考えているところでございます。</p>
<p>泉薫子 委員</p>	<p>ここに提案してあるようなニーズについてのもう1回見直すとかということは、今のところ考えていないということでしょうか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>もちろん、今こういった問題提起をいただいておりますので、ニーズ調査につきましても、どういったことが可能か等を議論させていただきたいというふうに考えているところでございます。</p>

す。

今後の予定なんですけど、先ほど城野校長からもご紹介いただきましたが、来月に教育委員と必由館高校生徒との意見交換会を開催できればということで今、必由館高校と協議をしているところでございます。さらにそういった意見交換を踏まえて、後に、何かまた必由館高校におきまして議論ができたらというふうに思っているところでございますので、我々としましても、できる準備は必由館高校と協力をしながら進めていきたいというふうに思っているところです。

泉薫子 委員

中学生の入学時点であるということを考えると、小学校の6年生が中学校の入学時点でどのようなお考えを持ってその学校に入るのかということが明確になるといえるか、高校がこういうふうになるので、こういう高校生になってこういう大人になるんだということを小学校の時点である程度の認識がないと決められないということを考えると、ある程度、そういうはっきりしたものがまずは提示されるのはもちろん、その年齢で将来を決めるということに対するちょっと不安といいますか、そういったのもあって、実際、小学校にニーズがあるのかということもちょっと心配するということなんですけど。

松永直樹 学校改革推進
課長

今おっしゃられましたように、ニーズについて当然、小学生が決めるというよりは、もしかしたら保護者のご意向もかなり強いものになってくるのかなというふうに思います。そういったものを考えましたときに、高校がいかに魅力的な学校であるかというのがやはり大きな1つの判断材料かと思えます。これも城野校長がおっしゃっておられますけど、やはりまずは高校が魅力化していくということ、それそのものが学校のかたちをつくっていくもの、もしくは学校のイメージをつくっていくものかなというふうに思っておりますので、まずは高校を魅力化するというのを先にという城野校長の必由館高校としてのご見解というのは確かに1つ方向性としてはあるのかなと思っております。

またそもそもこういった高校のあり方について、生徒が自分事として考えていくということ、それそのものが、いかに必由館高校が今現状で素晴らしい教育を行っていらっしゃるかという1つの証左でもあろうかというふうに思いますので、我々としましては、そういった既にできている取組については積極的

にアピールするとともに、今後どういったことが考えられるかというのは、必由館高校と協議をしていきたいと思います。

その中で、ニーズについては、どのように取っていくかというのはなかなか難しい部分がございます。過去にアンケートも取っておりまして、その中では一定程度のニーズがあったというのも事実ではございますが、現実的に、それが必由館高校へ、必由館中学校へ進学するニーズかどうかというのもまた正直分からない部分もございますので、今後そういったニーズについてどのように捉えられるかというのは検討を進めたいというふうに考えております。

遠藤洋路 教育長

今、課長が言ったように、世の中には公立、私立を問わず中高一貫校というものが現にあるわけで、中高一貫校そのものに対するニーズというのは当然、一定あるでしょうから、問題になるのは実際に個別の学校に対してニーズがあるかどうかということなんでしょうね。ですから中高一貫校に対する全体的なニーズというのを把握してもあまり意味はなくて、こういう学校だったらニーズがあるかというのを、ここにもあるように高校の特色が決まった後に、中学校がこういうかたちで、その具体的なものに対してニーズがあるのかどうかというところを調べていく必要があるんだろうなというふうに思います。

泉薫子 委員

分かりました。

出川聖尚子 委員

必由館高校に話を聞く機会のときにも、先生方の話を聞く機会のときにも、中高一貫の中学校の新設を生徒さんも先生方も、あまり前向きに考えていないと思いました。そして今回出てきた提案も、中学校については、肯定的な意見ではなかったのも、あまり望んでいないんだなというのを思ったんですが、私自身としては、私立ではいくつもあるんですけど、例えば市内に公立で中高一貫校があったら、公立であれば大変特色にもなるし、先ほども教育長が言われたんですが、高校が魅力的であれば、そういう学校に行かせたい、高校受験もなく中高の年代だからこそ充実できるような経験ができるんじゃないかと思う人もあると思うので、私自身としては中高一貫、公立でいいんじゃないかなと思っていたので、出てきた意見はあまり望まれていないというもので、どうしてかなと思っていたところでした。

またいろいろ必由館高校との交流、お話し合いの機会とか、そ

	<p>ういう場面があれば、もっと活発にお話ができればなというふうに思っています。意見です。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ありがとうございます。</p> <p>これは校長から見て、附属中学校、併設中学校に関して、非常に後ろ向きだというのは、この理由は何なのでしょう。1つは前回の案だと人数が全体として中学校も含めた定員だったので、高校の人数が減るとするのは1つあるんだと思いますけど。そうではなくて、中学校が併設されるということそのものに対する拒否感みたいなものもあったように思うんですけど、それはなぜなのでしょう。どんな理由があるんですか。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>現在、いろいろな中高一貫校があるので、個人的な意見として、自分の子どもが通っている時代とかそういうことを考えた中で個人的な発言としてなら言えるんですけど、学校としては、もう正直、建て増しもなく、クラスを高校の数を減らして、そこに同居するということに対する反対では確かにありました。</p> <p>ただ、やっぱりこの異年齢層がいるということの良さもあるんですけど、そこで成長段階の中で、中3生が年長者として味わう、学ぶべきものがなくなるというデメリットもあるのかなということもあるし、どうしても保健室に来るまでで対応している義務制の部分と、教室に戻して頑張って卒業を考えている職員が同じ校舎内で、同じ生徒を指導していくというものに対する不安感が大きいということが1つあります。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ごめんなさい、今のところはちょっとよく分からない部分があったんですけど、保健室と教室というのはどういうことですか。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>すみません。中学校が義務制の中で、卒業とかいう出欠とかそういうものがなくて、寄り添いながら学校に来て教室に戻ろうという、この学校の生活で保健室まで来させるということをやまず1つ、不登校になったりなんだったときにやっていくという部分と、高校の中で、授業の中で受けていかないと今のところ卒業できないという部分が、同じ保健室の中で生徒が休んで悩みを相談したときに、その文化の違いを同じ保健室で対応していくのはとても難しいかなという不安です。</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>なるほど。中学校は義務教育、高校はそうじゃないので、とにかく義務教育は授業に出る、出ないという問題ではなくて、優しく温かく卒業させてあげるということを重視しているけど、高校はちゃんと単位を取らなければ卒業できないよというその文化が両立できるのかという、そういうような今のご意見ですか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>簡単に言うとそういうふうなことです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>なるほど。分かりました。 既存の中高一貫はどうしているのかというところもあるのかもしれませんけどね。分かりました。 そういう異文化が入ってくることに拒否感みたいなものがやっぱりあるということなんですかね。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>やはり義務教育と高校という部分の文化の違いというものは、やっぱり不安感はともあります。別棟であればまだしもという感じで、子どもたちが通っていると高校とかだと別棟なもので、まだ違うのかなとかいうことがあったりするんですけど、それ以上にまだいろいろな課題が私の中であると思いますけど、この場ではここまでにしておきます。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>厳密に言えば、中高一貫校になったときの中学校は義務教育ではなくて、多分、仮に退学になったら通常の市立の中学校に転校するという方法があるので、もしかしたらそこは高校と同じ考え方でいいのかもしれないですけど。分かりました。ただそういうふうにもいれない部分もあるんでしょうから、中学校と高校のそういう文化の違いみたいなこともあるかもしれませんね。 中学校ができること自体に対するものよりも、物理的な施設面とか人数面ということは、そこはよく理解できるんですけど、中学校が併設されるということ自体がなんで困るのかというのはなかなかはっきり見えないところは確かにあって。人によって違うのかもしれないということはよく分かりましたけど、そこはまた今後も検討していくということですから、その中で実際どうなのかという話ができればと思います。 では、一通り委員の皆さんからもご意見いただきましたけど、あとはいいですか。</p>

苦野一徳 委員

最初にも申し上げたんですけど、階層構造でしっかり考えることが大事だと思うんです。何をしたいのか。理念はここにあるとおり、自ら考え、主体的に行動しと、こういう一番大きな目的があって、そのために3つの柱があって、さらにそのために普通科をどうするのかとか、中高をどうするのかというこういう階層構造になっていますよね。私たちはこういったことを考えるときに、そういう手段の部分に目を向けて、これはちょっとできないんじゃないかとか、これは何か嫌だなとかって、その手段の部分にばかり目を向けやすいですけど、まずやっぱりみんなで何をしたいのかということをしっかり話し合っ、そのために何をしたいかという、そうするとワクワクすると思うんですよね。これからの学校を、自分たちの手でとても良い学校をつくっていける、すごくワクワクするぞというこういう文化をまずインストールするというのが一番大事で、今の取っかかりに我々はあるのかなという気がしています。

改革検討委員会でも、中高一貫を1つのアイデアとして出したものでありましたけど、こういったアイデアもあるんだよということをテーブルに乗せながら、私たちはどういう学校をつくっていけばいいのかという、みんなが当事者でみんな考えていくということが大事だと思うので。中高一貫にしても長い目で見て、今後もニーズ調査等々をするというふうに書いていただいていますし、いろいろなアイデアをそれぞれ高校魅力化というお話も今ありましたが、今は全国で高校魅力化ということがすごい勢いで起こっていて、本当に魅力化をものすごくしている学校と、なかなか変わらない学校との差というものもすごく開いているんですよね。もう目の当たりに、私もたくさんしていますけど、そういったいろいろな情報をみんなでシェアしながら、もう一遍、何のためにどういうことができるんだろうというのを話し合う場ができれば。すみません、何も具体的な話はないんですけど、そのことがまずは1つ、とてもいいステップだったんじゃないかなというふうに感じています。

ひとまず来月、私も必由館高校の皆さんともお話しできるのをとても楽しみにしていますので、何かそういうみんながワクワクする前向きな場が今後も継続していけばいいな、そのことを大事にしたいなというふうに思いました。すみません、感想を一言。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

今日はこの学校の提案を初めて見たというそういう段階ですから、今後、この案に対していろいろな人の意見を、議会も含めて、市民の皆さんの意見も含め聞きながら、今後ではどういう形で最終的にまとめるかということを検討していくということかと思います。

一通り皆さん、ご発言されたようですので、本件は、今日はここまでにしたいと思います。引き続き検討したいと思います。

よろしいでしょうかね。校長からもいいですか、特に。

分かりました。では、本件は以上といたします。

・報告（2）金峰山少年自然の家整備について

《田口清行 青少年教育課長 報告》

遠藤洋路 教育長

これまでも再建の方針についてはご覧いただいているところですけど、今回はPFI方式ということ、それから名前、設置目的等、こういったところを新たに示したということになるかと思います。

特にありませんか。特段ご意見がなければ。

では、特にご発言がないようですので、本件は以上といたします。

ということは、大体これでいいんじゃないかというそういう意味でいいですよ、皆さん。

分かりました。これは特に議決する話ではありませんので、本件は以上にいたします。

・報告（3）子どもたちの心のケアについて

《川上敬士 総合支援課長 報告》

西山忠男 委員

その他の要因によるものが1,853人ということなんですけど、その他の要因を大きく分けて、対人関係、先生や友達との関係によるものと家庭の問題によるものに分けたら、どれぐ

	<p>らいになりますか、それぞれ。</p>
<p>川上敬士 総合支援課長</p>	<p>この調査では、その他の要因を要因別に区切っておりませんので詳細は分かりませんが、これまでのカウンセリングを実施したものの中で多いのは、どちらかというと本人の心身に関する悩み相談というのが上位を占めております。家庭的要因なのか、それ以外の要因なのかというと、そこについてはなかなか区別がきちんとできておりませんので、そこを今後分析して、結果等をお知らせできればなと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>家庭とか対人関係というよりは本人自身の問題の悩みが多いということですかね。分かりました。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>本人自身の悩みというのも結局は家庭の悩みなのか対人関係の悩みに由来すると思うんですよね。ですから、その辺をきちんと分析したほうが対策としてはいいんじゃないかなという気がするんですよ。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>本人自身の悩みも、例えば体の不調であるとか、学業の不調であるとか、対人関係でも家庭でもないものはあるんだとは思いますがね。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>あるでしょうね。あるでしょうけど、私が気にしているのは、貧困の問題とか虐待の問題とか、それから最近話題になっているヤングケアラーの問題とか、そういうこともいろいろあるような気がするので、そういう例えば貧困家庭が増加していることによって増えているというようなことがあるのかどうか、そのあたりをちょっと知りたいなと思ったものですから。</p>
<p>川上敬士 総合支援課長</p>	<p>あまり子どもたちというのは、そういう実感が持てていないのではないかなと、家庭の貧困ということが。昔の私たちの貧困と今の貧困というのは大分変わってきていて、貧困家庭でもスマートフォンを子どもたちが持っているとか、あまり子どもたちが実感するということがないのかなと思います。ご飯を食べられないとかいうことも現実問題として、いろいろな支援を受けている家庭が多いので、その辺は子どもたちが実感できていなくて、どちらかというと、やはり体のことの悩みだったり、先ほどの勉強ができないとか、そういった個人が抱えている悩</p>

西山忠男 委員

みの方が多く、これはSNSを活用したホットラインの検証会議の中でも一番多いのは、心身の悩みというところです。あまり家庭的なものというのが本人の悩みに繋がっているというのは今まで出てきたことはありません。

分かりました。

遠藤洋路 教育長

むしろ自覚できていないところに問題があることもあるのかもしれませんが、それはこれとはまた別の問題だということでしょうかね。

他にいかがでしょうか。特にありませんか。

では、他にないようでしたら、本件は以上といたします。

・報告（4）不登校児童・生徒に対するオンライン学習支援について

《川上敬士 総合支援課長 報告》

苫野一徳 委員

こちらの取組は私もテレビで拝見して、本当に素晴らしいなと思って、川上課長のコメントで、学校復帰を目指すというよりは学力保障や学びの保障をというそういったお言葉もとても素晴らしいなと思って拝見をしたんですけど、ちょっとお伺いしたいのが、1ページの下のスライドで、①～④どこにもつながない児童生徒が414で、さらに3か月間、出席が1日もない児童生徒が104人で、今、この申込状況を見ると121人、ということは、そこはかなりリーチできているということなんですか。その部分をすくい上げられているというそういうこれ読み方でいいんでしょうか。

川上敬士 総合支援課長

一番下の104人というのが、これが414人の中で3月に1日も登校できなかったという人数なので、3月というのが卒業だったり進級で、子どもが1日来て、ここには入っていないわけです。この104人というのはもう3月も全く来られなかったという子なので、この子たちが本来であればターゲットなんですけど、正確に分析はできておりませんが、この子たちに学校の先生がオンラインを勧めても、なかなかそれが情報としてきちんと伝わっていかないというのが恐らくこの104人

	<p>だと思えます。登校を促しても、なかなかできない子どもさんなので、この子どもたち、または保護者の方にどうこの事業を伝えていくかというのはこれから大きな課題です。</p> <p>ただ、414人のうち、中学3年生は、これは2年度のデータですから、もう卒業しているので、それを抜くと大体270人ぐらいです。その中でこのオンライン学習に申込みがあっているのが17人程度です。だからまだまだこの100日以上でどこにもつながっていない子がここにどんどん参加してきているかということ、まだそうではありませんので、これからどうしていくかということをしっかり取り組んでいかないといけないというふうには考えております。</p>
苫野一徳 委員	<p>すみません、表をじゃ、私、読み違えていましたね。③のオンライン学習支援というここに入るんですね、この今回ご報告いただいた人数は。</p>
川上敬士 総合支援課長	<p>この表の③のオンライン学習支援というのは、これは学校が行っている支援を受けている子が小中合わせて88人いるということ。だからこの子は学校とつながっていますので、委員会がやっているオンライン学習支援の対象では基本的にはないんですけど、実際今、体験なので、こちらにも申込みもして、学校のオンライン支援も受けている子がおります。ただ、やっぱりその子たちというのは、学校の方のオンラインのライブ配信を見ている状況があるので、そのときは、こちらは欠席しているということです。申し込んだのでこっちに入ってきてくださいという呼びかけはあまりせず、もう本人、保護者にお任せして、好きなときに入ってきてくださいというのが今のスタンスです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>これは昨年度の数字だということですよ、基本的に。</p>
川上敬士 総合支援課長	<p>そうです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>3月の1か月の数字なんですか、これは。</p>
川上敬士 総合支援課長	<p>414から上というのは、これは1年間の数字で、最後の青色が濃いところだけが3月に限定した数字ということになります。</p>

遠藤洋路 教育長

分かりました。この時点ではまだこのオンライン学習支援のシステムが始まっていないので、去年、この状態だった子どもの中でどこまでこの下のほうの色がついているところの子どもにリーチができていくかという、先ほど課長の話だと、まだ17人ですか、少数だということですね。

川上敬士 総合支援課長

実際取材も受けるんですが、電話とかで説明しても、やっぱり今まで、どこもあまりやられていないので、イメージができないと思います。実際、本荘小や芳野中に行っていただくと、どういうかたちで支援しているのかというのが、イメージができるので、こういうまだつながっていないお子さんに対して、やはりそういうのがイメージできるような伝え方や動画が必要で、パワポのスライドで説明動画をつくっているんですけど、それでも実際にはイメージができないと思います。子どもたちは今、Zoomでやっていますが顔出ししません。声も出さないうえ、そのため支援する先生とチャットだったり手を挙げるスタンプ、OKのスタンプ、こういうもので対話をしています。それが分からないので、オンラインで学校とやっているイメージがあると、顔が映るんだったら嫌だなというイメージを持ってしまうので、こういう子たちはなかなか興味を持たないと思います。実際にやっているものを配信できるのであれば、こういうふうに行っているんだよという説明もできるのかなとは思っております。

遠藤洋路 教育長

こういうどこにもつながっていない子どもにどうアプローチするかという、そういう支援している団体とか、何かルートがあればいいのかなと思いますし、テレビとかインターネットとか、そういう一般的な方法をひたすら繰り返していくというのも1つの方法なんでしょう。あとは口コミというか、不登校の状況の人たちのもし横のつながりがあるなら、その中に口コミで広がっていくという方法もあるでしょうし、いろいろやってみるしかないですかね。

西山忠男 委員

私も大変素晴らしい取組だと思ったんですけど、今ご説明のあったような双方向のオンライン学習となると、相当マンパワーが要りますよね。オンライン学習支援員を配置とありますが、それは何人ぐらい配置されているんですか。

川上敬士 総合支援課長

本荘小学校は加配教員の先生が1人と再任用の先生1人の2人でされています。芳野中学校は再任用の先生1人なのですが、芳野中学校は3クラスしかありませんので、先生たちは7人とか、教科ごとにいらっしゃるの、空き時間の先生がお手伝いされているということです。だから本荘の場合には学年ごとの授業というの、基本的には1人がされるんです。芳野中の場合にはオンライン学習というのが入っていますが、教科の先生がいらっしゃるの、教科で授業をすることができるということなので、小学校と中学校でできる内容も変わってきます。

ただ、実際今まで3か月間やってみて、芳野中学校の場合、1人で機械操作とオンラインでのやり取りをするというのは非常に大変だということで、基本的には1スタジオには2人、機械操作をしたりチャットで返ってきたものを添削して返してあげる先生がいて、なおかつ画面上で子どもたちとやり取りをする先生がいるという2人が一番いいだろうということです。

今は体験学習の段階ですが、これを4月から本格実施にする場合には、今の1スタジオではちょっと無理があると考えています。特に中学校の場合が3学年を一緒にやっていますので、やはり各学年ごとにスタジオをつかって、そしてそこに人を増やしていくということで、予算要求もさせていただいているところです。

西山忠男 委員

分かりました。

遠藤洋路 教育長

登録している人はそれぞれ30人、80人というわけですが、実際に参加している人の数はそこまではないわけですよ。だから今のところは2人で対応しているわけですが、もっと増えてくれば、やっぱり人も増やしていかなければいけないということだと思います。実際どうですか、参加者というか、毎日のオンラインに入ってくる人というのはどのぐらいの数なんですか。

川上敬士 総合支援課長

大体毎日入ってくるのが半分ぐらいで、小学校が15人程度、中学校が20人程度ということです。ただ小学校の場合は15人ぐらいが6学年あります。発達段階や学力面で違うので、今は1・2年生、3・4年生、5年生、6年生という4分割で、1日はどちらかというと自主学習を行っています。

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>中学校は今、中1から中3までを一緒にやっていますので、1人の先生ではやっぱり負担が大きいので、これを3学年に分けてやれば、もっとやりやすくなると考えています。</p> <p>当面、小学校は低学年、中学年、高学年とか、中学校も1年生、2年生、3年生とか、そのぐらいに分けてできるといいのかなというふうには思っています。</p>
<p>苫野一徳 委員</p>	<p>もうこれだけ学年も違い、学びのステージも全然違う子どもたちがいる中で、一気にやってしまうのはそもそも不可能だと思うんですけど、そういえば、熊本市は「Q u b e n a (キュービナ)」を導入という話がありましたよね。そういったものの活用ってどうなっていますか。</p>
<p>川上敬士 総合支援課長</p>	<p>やはり個別に先生が支援していくというのは、到底不可能ですので、子どもたちの学力のレベルも全部違いますので、「Q u b e n a」も検討したんですけど、「すらら」というAI機能のついたアプリを現在は無料で使っていますが、来年度は予算要求して有料でやる予定です。これは動画がそれぞれの単元についています。子どもたちはそれを見て学んで問題を解く、そうすると正答率とか間違っている内容によってAIが次はここを勉強したらいいよという案内をしてくれて、それに沿っていくと学び残しのところからずっと学習ができるようになっていきます。そこで分からなかったものをチャットで教えてくださいというと、先生がそれに答えていくというやり方で自主学習はやっています。国数タイムとか、芳野中学校のオンライン学習は、実際の授業と同じようなかたちで先生がされるもので、学習についてはこの2段階の方式でやっていくということです。</p>
<p>苫野一徳 委員</p>	<p>ありがとうございます。</p>
<p>小屋松徹彦 委員</p>	<p>ちょっと関連で、基本的な質問なんですけど、①から④どこにもつながっていない児童生徒の414の生徒さんも、全部タブレットが行き渡っているんですかね。であれば、まだ少ないという原因の1つに、技術的にアクセスできないという、そういう可能性というのはないんですか。</p>
<p>川上敬士 総合支援課長</p>	<p>毎月取っているアンケートの中にも、やっぱり若干あったり</p>

	<p>します。電話での保護者から問合せでも、子どもがなかなか操作が自分ではできにくいというものがありますので、ここも1つ課題かなというふうには思っております。</p> <p>例えば学校の先生が家に行って操作を教えていただく、この支援員の先生が行くというのはちょっと不可能ですので、そういった協力を学校の先生にもしていただきながら、操作ができるといいんですけど。それですみずかれています子どもさんも0ではありません。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>毎日家に行って操作を教えるという意味じゃなくて、家庭訪問とかをして最初に操作を教えてあげることですかね。分かりました。</p> <p>小屋松委員、よろしかったですか。大丈夫ですか。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>結構です。</p>
出川聖尚子 委員	<p>この取組についてはどのように広報しているのかを教えてください。つながっていないお子さんにどういふふうにつなげるかが課題だとおっしゃっていたかと思いますが、現段階でこのオンライン学習支援については何か広報とかされていますでしょうか。</p>
川上敬士 総合支援課長	<p>まず、不登校の子どもさんのところには、学校を通じて説明用のチラシを配ってもらっています。この説明用のチラシにはQRコードが2つあって、1つは先ほどの説明動画に入っているもので、これはYouTubeで見られるんですけど、それで説明を見ていただくことにしています。もう1つは申込みのQRコードで、ここにつないでいただくと総合支援課の担当のところに入力があって、連絡先とかも入れてもらうようになっていますので、うちの指導主事から各ご家庭に連絡を入れて聞き取りをするようにしています。あとは熊本市のホームページにはチラシを載せてあります。大体この2つです。</p>
出川聖尚子 委員	<p>説明動画をご覧になっているかどうかという数は分からないのでしょうか。YouTubeとかに入る方法なら、見られた数とかがあるのかなと思ったんですけど。</p>
川上敬士 総合支援課長	<p>すみません、その発想がなくて、できるのかどうかもちょっと</p>

遠藤洋路 教育長	と分からないですが、確認できればやってみたいと思います。
出川聖尚子 委員	<p>You Tubeって、見た人の数は単純には分かりますけどね。</p> <p>関心を持っていらっしゃるのかどうかというのが分かるかなと思ったので。</p> <p>良いものがあっても繋がらないと、と思うので、紙媒体だとお父さん、お母さんが持っているかもしれないので、子どもさん一人一人にメッセージが送れるのであれば、そこにも載せて直接子どもにアプローチできるかというのかなと思いました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ありがとうございます。</p> <p>この414人とかさっきの104人という人もタブレットは持っているということでしたか。</p>
川上敬士 総合支援課長	<p>全ての子どもにタブレットは行き渡っておりますので、もちろん、この414人の子どもさんはタブレットを持っています。ただ、やはり子どもに合う、合わないというのがどうしてもありますので、私たちは、これで何でもかんでもオンラインにつながないで支援をしようというスタイルでは実はありません。つながる子どもにはつながって、ここで頑張ってもらいたいし、つながらない子どもさんに、じゃ、次どうするのかというのが今後考えないといけないことだと思います。だから、つながるための努力は広報にしろやっていますけど、それで、じゃ、全部につながるかという、そうとは思っておりませんので、また新たな課題が多分生まれてくるんじゃないかなと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>せっかくみんなタブレットを持っているのであれば、チラシを紙で渡すだけでなく、タブレットを通じて情報を伝えるということは確かにできるでしょうね。</p>
出川聖尚子 委員	<p>つながらないというか、つながれないお子さんは、タブレットが苦手ということなんですか。それと、つながれない人もつながれないで何か支援が必要だとおっしゃったかなと思ったんですけど、タブレットで学ぶことが苦手なお子さんは違う方法でということをおっしゃったんでしょうか。</p>

川上敬士 総合支援課長	そうです。タブレットを持っていても実際、昨年の休校期間や、この間、分散登校とオンラインをやりましたが、全ての子がずっと入ってきているかという、やっぱりそうではなくて、こういう電子機器だったり端末が苦手なお子さんは持っていても使っていないという事例もあるんじゃないかなと思います。特に不登校になっている子どもさんの中で、本当になかなか学校も会えないような子どもさんというのは、タブレットがあっても開かないとか、そういう方もいらっしゃると思いますし、見てもここに興味を示さない子どもさんもいらっしゃると思います。
出川聖尚子 委員	分かりました。ありがとうございました。
泉薫子 委員	不登校の子どもの中には、やはりコミュニケーションが苦手ということで、オンラインでつながるのもコミュニケーションの1つですので、多分それができないという子どもさんもおられるんだと思うんですけど、ただ、一旦、登録されてというか希望されて、その後、キャンセルされたという方も、あまり多くはなさそうですけど少し数的にはおられるのかなと思うのですが、その原因というか、何か続かなかった要因みたいなのを掴んでいらっしゃったら教えていただきたい。
川上敬士 総合支援課長	保護者へのアンケートには、つながっている子の保護者、つながっていない子の保護者もここに返信をされます。よくあるのが、親が非常に良いと思って申し込んだけれど、子どもは全く興味を示さなかったというものです。基本的に今は向こうからキャンセルしてくださいと申出がない限り、ずっとつながれるように準備をしています。どこかで気持ちが変わってとか、友達伝い、不登校でつながっている子たちもいるかもしれないので、それでこれ面白いよと聞いて入ってくる子もいるかもしれないので、基本的には切らないようにしています。その辺もきちんと保護者に教育委員会のほうから返しはしております。
泉薫子 委員	分かりました。
遠藤洋路 教育長	他にはいかがですか。よろしいですか。 他にご発言がなければ、本件は以上といたします。

〔非公開の審議〕

日程第4 協議

- ・協議（1）令和4年度予算要求の概要について

《中元正人 教育政策課長 提出理由説明》

日程第3 議事

- ・議第84号 令和4年度（2022年度）市立学校の管理職（再任用）の採用について

《濱洲義昭 教職員課長 提出理由説明》

〔採決〕 **【原案どおり承認された】**

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の日程は全て終了したので、令和3年11月の定例教育委員会会議を閉会いたします。お疲れさまでした。